

平成十七年度全国婦人相談員・心理判定員研究協議会講演

基地と沖縄の女性達

— 国際福祉相談所窓口から見たケースの変遷 —

沖縄国際福祉相談所次長

平田正代



ご紹介頂きました平田でございます。適分なご紹介を頂き、たいへん感謝しています。今日は、一人のケースワーカーの立場でお話をしたいというのでしたので、私がこれまで経験してきたことや見てきたことをご紹介します。



たいと思いき、今こちらに立つている次第です。

平田正代氏（ひらた・まさよ）
●昭和14年生まれ
●昭和33年、那覇高校卒業後、早稲田大学に入
学。卒業後ニューヨーク州立バックアロー大
学社会学部修士課程に留学
●昭和42年、国際社会事業団沖縄代表部（現沖
縄国際福祉相談所）ケースワーカーを経て、
現在に至る
●国際福祉問題に幅広く取り組み、国際児の国
籍問題については民法改正に至る大きな功績
をあげた。クワイアメントの立場に立った仕事
ぶりが評価される他に裁判所の登録通訳人、
沖縄県人材育成財団通訳学習センター講師を務め
る

戦後五十年のこの年に「全国婦人相談員・心理判定員研究協議会」がこの沖縄で行われたことは、非常に時宜を得た意義あることだと思います。

研修会の会場となりましたこのロワゼルホテルのある場所はミーグスク（三重歌）と言いまして、昔は船の出入りがあつたところで、親しい人や恋しい人の乗った船が出て行くのをみんなこぼさ返つたものです。また、この一帯には昔辻という遊廓がありまして、多くの女性が売られて来て、ここで生活したわけです。そして戦後はこの地帯を波の上と申しまして、米軍

相手のバーや特飲街ができました。

皆さんがお降りになった那覇空港はもともと那覇エアベースという非常に大きなアメリカの空軍基地で、当時は那覇と嘉手納の両方に空軍基地がありました。復帰までずっとメインの米軍基地として存在していましたので、家族もたくさん駐留していましたし、学校もありました。その基地から近いということもあつて、ここがいわゆる米兵相手の波の上特飲街ということになりました。この辻には今も、昔の遊廓の名残の料亭などが残っていますが、その中の一つの料亭の下は、当時のアメリカの占領政策をおもしろ可笑しく書いた戯曲『八月十五夜の茶屋』の舞台になった料亭です。

またこの波の上は、那覇エアベースがベトナム戦争や朝鮮戦争の時に後方支援基地として、物資輸送の船が頻繁に出入りするようになったため、軍に徴用されている船の乗組員達がここにやつて来て遊ぶようになり、大に賑

わいました。

沖縄の基地は物資を運ぶだけではない、ベトナムから運ばれた壊れた戦車や車両を修理をしてまた送り出したり、ベトナム戦争で亡くなったアメリカの兵隊達の死体が氷漬りになつて運ばれてくると、それを敏達の船給基地で洗つて綺麗にお棺に納めて米本国に送る作業も行われていたということです。

ですから、このような地と皆さんがお集まりになるということ、さらに明日（十月二十一日）、県民総決起大会があるというこの時期に皆さんがこちらにお出でになつたこと、そして戦後五十年を踏まえ、これからの女性の保護や行政について考えていく上で本当にいい時期であり、いい場所であると思います。

戦後の社会環境と女性

「国破れて山河あり」という中国の詩がありますけれども、沖縄の戦後は

国破れて山河も無くなり、アメリカの軍艦に島中がとり囲まれて、地形が変わるほどの艦砲撃を受けました。そして昭和二十年四月一日、中部の磯合村にアメリカ軍が上陸しましたが、伝言聞いたところによりますと、翌二十一年の一月、二月にはもう流血鬼が生まれたということです。ということは、お互いが知り合つて意気投合するというような時期でも、時間でもありませんので、上陸した時点からいわゆる強姦というのがあつたということになるわけです。

その時からずっと沖縄は否応なく米軍基地と隣合わせに暮らして参りました。生きるために、米軍とのいろいろな関わりの中で沖縄の人はたくましく生活してきたわけです。特に女性のたくましさや沖縄の戦後を支えてきたと言つても差し支えないと思います。

終戦時の人口についてはハッキリした数字ではありませんが、男性は兵隊に取られたり、戦死したりしましたの

で、人口比は男性三に対して女性十であつた聞いています。確かに終戦後の学校の先生はほとんど女性でした。

米軍が圧倒的な物量を持って駐留する中で、生きるためにそこに仕事を求めていかねばならない現実がありました。技術者も通訳になる人もいました。それ以外の普通の人は、男の人はつとより早くカーテンボーイになつたり、兵隊達の宿舎でハウスボーイをしたりしていました。ハウスボーイというのは公の仕事ではなくて、兵隊達がお金を出し合つて若い男の子を雇ひ、米兵の靴を磨かせたり、アイロンかけや小間使いをさせていました。中には兵舎に住み着いて、学校にも行かずアメリカ兵の家族のように暮らした戦争孤児もいたということです。

女の人はハウスメイドが多くて、その頃の沖縄は何も無いですから彼女達は自分の家の洗濯物も抱えていつてアメリカの洗濯機で、アメリカの石鹸を使って洗つて、アイロンまでかけて

ですが、今考えますといわゆるケチャップライスなのです。私達はだんだんそういうアメリカ風の味に慣れていきました。

食料の無い沖縄に外地や他府県から多くの人が引き揚げて来たので、たちまち食料危機に陥りました。蘇鉄の幹には毒があるのですが、それを薄く切つて腐らして毒を出してから煮る。おいしくはないのですが、庶民粉ですのでそれを食べた、いわゆる蘇鉄地獄といわれた時期がありました。その中で、体をこわして結核にかかる人もたくさんいました。瘧疾によくきくベニシリンというものがあつたらしいということで、家族の養代のために女性が売春をすることもありました。このような社会状況でアメリカ兵相手のハンバン、沖縄ではハーニーという言い方をしますが、そういう女性が増えてきました。

その頃は米軍で仕事をするしか収入の道が無かつたわけですから、ハウスメイドになつた女性がそこでレイプさ

持ち帰るといふようなたくましい生き方をしていました。アメリカ兵達も、それに目くじらを立てるようなことはなかつたようです。そういうように、本土と切り離された沖縄の戦後というのは他府県に比べて非常に長く、みんなが貧しい時代というのが続きました。

私は戦前、東京にいましたが、戦争が終わると、施政権が分離されるため沖縄に本籍を持つ者は原則として帰るようにとのことで、小学校一年生の時に引き揚げ船で帰つて参りました。名古屋あたりの取寄所に沖縄出身の人達が集められてしばらく生活し、その後船に乗つて来たんですが、その船が戦争映画に出てくる上陸用船、兵隊が浜に着くとバツと船の後が開いて上陸する船です。それに乗つて帰つてきました。どれくらいかかったかは分かりませんが、二三日かかつたように、その間与えられたものはシーレイションという米軍の非常食でした。今も土産品店などで売られていて、観光客に

れて子供を産んだというケースもありました。その中にこんな話があります。

レイプされて男の子を産んだ女性ですが、その子が大きくなつて、学校でのいじめられるようになる。これは親の責任だ、どうして自分を生んだか息子に母親に暴力を振るうようになり、母親は息子の暴力から逃げ回つていたのですが、やっぱり子供のことが心配で、時々息子のいない時を見計らつて家に帰つて、御飯の用意をしたりしていたのですが、たまたま子供に見つかつてしまい、その時息子が母親をつかまえて、お前のせいで自分がいじめられるんだと問い詰めたわけです。その時、母親は息子の姿とレイプされた時の状況が重なつてとても怖かつた。どうしていいか分からなかつた。話を聞いていました。非常に悲しい事件です。

そういう中で混血児達が生まれていったのですが、親戚などが引き取つたりして、孤児とか浮浪児といったのはほとんど沖縄にはいなくなつたようです。ま

は非常に人気があるようです。

パッケージの中にチューインガムや乾燥肉やチーズなどいろんな非常食が入つていて、三食それだけを与えられました。我々子供はそれを開いてチューインガムやチョコレートなどを食べていました。みんなお腹は空いていたと思うのですが、よほど食べにくいものだったのか、大人達はほとんど何も食べないで寝ていたように記憶しています。チーズも石鹼のようにしか見えませんでした。

このようにして他府県や外地から沖縄に引き揚げて来た人達は、テント張りの金網に囲まれた米軍のキャンプで集団生活をして、そこから自分の家や家族や親戚が無事かどうか調査に行つて、行き先が見つかった者はそこを出ていくというふうな生活でしたが、私どもは二か月も三か月もそこに居たように感じます。

キャンプで、バケツに入つた赤い御飯が非常に鮮明に記憶に残つているの

だ。混血児の場合には一九五〇年代の初めにアメリカの婦人会や左翼婦人会が一緒になつてハーフウェイハウスというのをコサに作りまして、身寄りの無い混血児を集めて、国際養子縁組をしてアメリカへ送る仕事を既にやつていました。

一九五七年には国際社会事業団の日本代表部が東京にできまして、当時は施政権が別です。翌年、沖縄にも国際社会事業団沖縄代表部というのが置かれました。それが国際福祉相談所の前身で、一九五八年から混血児の問題、養子縁組などを中心にした福祉活動が公に始まつたわけです。

一九六六年ぐらまではアメリカ人の所長が送られて来て、職員は沖縄の人と基地内のボランティアとでこの仕事をやつていました。

養子縁組に伴う家庭調査が主な仕事でしたが、話を聞いて子供を抱えて連れてくる人や子供をあげたいと相談に来る人達が増えてきました。また一九六七

く八年ぐらいまで、朝出勤すると、入口に赤ちゃんを抱いた女性が待っているというふうなこともありました。

混血児といっても自分の子供ですから、ともかく一生懸命育てようとしながらも当時の経済状況ではどうしようもない、周開からの援助が得られない、家族からも受け入れられないということまで来たというのがほとんどですから、子供をほったらかして行くというふうなことは全くありませんでした。沖縄にいたら子供の将来が無いからということで泣く泣く子供を預けていくというのが現状でした。

またその当時、基地作物論といまして、基地も一つの作物であり、収穫があるという論議がされたことがありますけれども、米軍の圧倒的な金と物によつて沖縄全体がそういう雰囲気の中に組み込まれていった時期でした。アメリカ兵を相手にする女性がいれば、そういう人達に部屋を貸す人がいる。そして洋服店がたくさんできる、

う家族のために女の子が前借金をして働くということがありました。

その前借金の絡む話ですが、当時の沖縄の所得は非常に低いですから、百ドルというともう大変な額でしたがアメリカの兵隊にとってはまあ何とかかなるような額だったわけですね。ですから学校を卒業してすぐ沖縄に配属されてきたような若いアメリカ兵が沖縄で初めて女性と知り合い懇ろになつて、話を聞くと家族のために前借金があるという、これは可愛そうだと、いわゆるアメリカ人の正義感から一生懸命お金を作つて前借金を返して、その女の人を管理売春から救つて結婚したというような話はたくさんあります。

当時、金網を隔てて見る基地の中の豊かな生活と憧れを持つのは当然のことです。ハニーやオンリーさん達が綺麗に着飾つて出て行くのを見ると、女の子達は真っ黒になつて働く自分の母親と比べて憧れを持つような社会風潮が出てきます。また、自分の家や隣

ベッド屋さんができる。その人達が綺麗にして出かけるために美容室ができる、レストランができる、というふうな、それに連関した方向にどんどん沖縄の経済が進んでいったわけですね。それを称して、ちよつと聞こえは悪いんですが、股間産業と言つた新聞記者がいたということです。

日米関係と沖縄

一九四九年に中華人民共和国ができ、その翌年には朝鮮戦争が始まると日本は軍需景気に沸きました。米軍施政権下の沖縄は否応なく極東の軍事的緊張の中に組み込まれていきました。それからベトナム戦争へ至るまで、沖縄はアメリカ軍の極東における活動の中心と位置づけられ、キーストンオブザパシフィック、いわゆる一大立洋の要石と呼ばれました。

そういう中で、売春が必要悪としてはびこつていきました。家族の結びつきが非常に強い沖縄では、家族のため

近所にそういう女の人が間借りしているというふうなこともごく普通にありました。

そういうことから、基地の中に何とか入り込んで豊かな生活をしたいというところで、基地に入内できるＩＤカードを求めてアメリカ人と結婚する人達ができます。ＩＤカード欲しさに結婚して、どんな嫌な仕打ちを受けても家族のため、自分のためにこれにしがみついで、離婚ということはほとんどありませんでした。実質的な離婚意識はあつたかも知れませんが、国際福祉相談所へ相談に来て離婚するというのは六十年代の後半までは非常に少なかったのです。

日本復帰の頃に、離婚その他の相談が非常に多くなつて、女性の側からの離婚というのが国際結婚で出てきたのは六十年代の末から七十年代にかけてです。

ベトナム戦争の頃は沖縄はベトナム景気に浮いていました。アメリカ兵は

に女の子が外で稼いでせっせと仕送りをしました。メイドに行つて、兵隊遣いが吸つた煙草の吸殻を集めて来ると、おぼあちゃん達が紙を剥がして巻き直して吸つたりしました。

また、米軍には物が溢れているので、いわゆる職車をまげるといふことで、倉庫番をしながら軍の物資を盗んだり、もつとスケールが大きくなりまして輸送部隊のトラックに資材をいっぱい積んで、基地には行かずに自分の家の近くの広場に全部資材を下ろして置くということもあつたようで、そういう資材を集めて家を建てた人達もいて、沖縄のたくましさというか、男性にも女性にもしたたかなさというのがありました。

売春が出てきますと、それを簡売として利用する管理売春、前借金で女性を縛る者が出てきました。家族の入院費用とか、あるいは沖縄には男の子は家族の希望を担つて教育を受けさせるという考えがありましたので、そい

ベトナムであのような職闘を潜つてくらくも命拾いをして、一週間なり二週間の休暇を与えられてたくさんのお金を持って沖縄に来る。しかしここで二週間過ごせばまたあの戦場に帰つてすぐ死ぬかも知れない。だからこのお金は貯めたりする必要が全くないわけですね。ですから当時のお金で千ドルとか二千ドルという家が建つようなお金を持って来て、それをコザの街で全部使う。自分達の気持ちや発散する相手というのが沖縄の女性しかいなかったわけですから、そこでどんどん使つた。

当時のバーでは、カウンターの下にチリ箱をいくつも置いて、それに受け取つたドルをどんどん入入れて、もう数えるところではなくて、もつと入るように足でお札を踏みつけながらドルを紙屑のように受け取つたと当時、バーを経営していた人達が言っています。ですから売春をしていた女性たちを責めても、当時は沖縄全体がベトナム戦争の恩恵にあずかつていたわけですね。

復帰前後の葛藤

やがて日本復帰が具体化してきました。復帰を前に、混血児を持つお母さん達が非常に動揺しました。復帰すると混血児を日本政府がどのように扱うのだろうかという素朴な不安でした。

当時、沖縄の学校に入れるといじめられるというので、混血の子供達はほとんど教会系の私立のインターナショナルスクールに通っていました。母子家庭で私立の授業料を払えない家庭もありますので、それについては在沖アメリカ人ビジネスマンが琉米児童基金を作つて援助していました。沖縄はまだ貧しく人種偏見もあるので、混血児には英語を教えて将来はアメリカにやつた方が幸せになると、親も周囲も信じていました。

ですから、混血児とその親にとつてはアングルサム、いわゆるパトロンとしてのアメリカというのが歴然とながらそこにあつたわけで、アメリカがい

子供の親権は母親が持ち、沖縄の地域社会に住んで、沖縄の学校に通つていても日米地位協定からの離脱ということとは非常に困難なのです。しかも離脱しなければ外人登録ができず、日本側からの必要な援助や保護が得られない。日米地位協定の範疇の人というのは日本の法律の管轄外にあるわけです。

例えば、調停離婚をして養育料を払わなくても、履行勧告を強制することは非常に困難です。厳密には基地は治外法権ではないと言われますが、実態としては治外法権とかわりないと思えます。

アメリカ側の解釈は、兵隊、軍人、軍属がスポンサーで、妻や子供はその扶養家族として沖縄に来ているので、スポンサーの身分が変わらなければそれに付随する扶養家族の身分も変わらないということです。日本国籍であれば完全に日本側の制度に入つてくるわけですが、日米地位協定が絡むいろいろな問題が出てきます。

なくなつて日本政府というお父さんが出てくるとどういう取り扱いを受けるのだろうかという不安で、国際福祉相談所になくさんの相談が持ち込まれました。

相談に来た混血児の多くは非嫡出子で日本籍で、将来アメリカへ行く現実的可能性のある者はほとんどいませんでした。今後、地域社会で生活していくためには日本の学校に入って日本の資格を得て、日本の社会でたくましく育つていった方がいいのではないかとアドバイスしましたが、アメリカンスクールに残つた人達もずいぶんおりました。

本土化の波が押し寄せてきて、琉米児童基金に寄附をしていたアメリカの会社やビジネスコミュニティーがだんだん日本本土系の企業に押されてなくなつてしまい、結局この基金が続かなくなり、私立の学校の授業料が出せない子供達は沖縄の学校に移つていきました。沖縄の学校は本人が希望すれば、混血

児であっても外国籍であっても、無国籍児であっても全部受け入れていました。

我々は「核抜き本土並み」の日本復帰ということでは復帰運動をしてきたわけですけれども、現実には全国の基地の七五パーセントが沖縄にそのまま残されました。

那覇エアベースは無くなりましたが航空自衛隊が来ました。そして沖縄の航空管制権は今でも嘉手納基地が持つていて、その下に民間の航空管制があるわけです。

今問題になつてくる日米地位協定は犯人の引渡しなどの矛盾が指摘されていますが、福祉や人権の面からもおかしいと思われるものが幾つもあります。

例えば、アメリカ人の男性と日本人の女性が結婚して、子供が生まれ、子供はアメリカの国籍しかもっていないとします。この夫婦が沖縄に帰つてきて離婚をした場合、父親が日米地位協定の範疇に入る軍人、軍属であれば、

無国籍児問題

そのようなことで無国籍児の問題が復帰後に出てきました。一九七九年の国際児童年に、当時の国際福祉相談所事務局長、大城安隆が沖縄に無国籍児がいるということをマスコミに発表しました。それは高度成長の夢に酔つていた当時の日本全国のマスコミ一般の人を驚かせました。こんな豊かな日本に無国籍児がいるのかということで大変びっくりして、それから取材攻勢が続きました。早速日本弁護士連合会がイニシアティブを取つて調査団を派遣しました。

また、当時は国連婦人の十年という中で女性の権利の問題や男女差別撤廃の問題などが非常に盛り上がりつづけている時期でしたので、女性団体がこれを男女の不平等ということを取り上げました。つまり日本の国籍法で父親だけの国籍を取るというふうに決まっていたので、母親の国籍を子供に与えること

ができず無国籍児が生ずるということで、国籍法の改正の運動が出てきました。

私どもは法務省の中間啓申のための法制審議会や国会での聴聞会にも参考人としてケースワーカーが出席し、意見を述べました。

日弁連や婦人団体や沖縄内のいろいろな団体が一致結束して運動したのが大きな原動力となつて国籍法が改正されたのが一九八五年（昭和六十年）でした。沖縄からの訴えが大きなうねりとなつて国籍法が改正され、母親の国籍も父親の国籍も同じように取得できるようになりました。

一九七九年当時、無国籍状態であつた子供は約七十人程でした。その時に不思議に思つたのは、沖縄ではこういう問題があるのに、同じように基地のある岩国や横須賀など他府県からは何も出てこないということでした。同じような無国籍児が他府県の米軍基地の周辺にも絶対にいるはずだと私達は確

信していましたが、結局何も出てきませんでした。問題を抱えていても、社会的に声を出すこともできずに抑圧されていく、他府県の社会状況があったのではないかと推測されます。

沖縄の場合は社会規範というものが緩やかですので、それが沖縄のいい加減さとか、優しさにも繋がってくるわけですね。母親は子供がいると働けないので、混血児を自分の実家の母親に預ける。田舎や離島等に混血児の調査に行きますと、おばあちゃん達が肌色の違う孫を大事に抱えて、必死に守って育てていました。そういうよさが沖縄にはあった。そして問題を提起させるだけの緩やかな沖縄の社会状況があったのだと思います。

外国人女性からの相談

私達の事務所では国際的な福祉相談を取り扱っているのですが、そのほとんどはアメリカ人との間の問題です。

基地内の軍人・軍属及びその家族の

耐えて国際結婚を継続する必然性が無くなってきました。離婚も女性の側から起こすようになりました。

戦後、沖縄に駐留していた米軍の中には大勢のフィリピン人が軍人・軍属として組み込まれていました。フィリピンの人は白人と沖縄の人の中間ぐらいの肌の色ということもあってか、非常に沖縄の人との接触も多く、戦後直後にフィリピンの男性と結婚した沖縄の女性はたくさんいました。ほとんどの方がそのまま夫についてフィリピンに行き、今でもフィリピンで暮らしている沖縄の女性はかなりたくさんいます。その人達の子供が沖縄に来て日本籍を取得したり、帰化したりということが最近も多く、今は外国人の問題というと、米軍の基地関係者に次いでフィリピン関係の相談が多いのが実情です。

また戦前にもマニラ麻の栽培などによって沖縄からフィリピンへたくさん行っていました。沖縄は台湾にも近いですが、台湾との交流もありまして、戦前は

人口がだいたい常時五万人から六万人ぐらいおりまして、外人登録して沖縄にいる民間人達はその約十分の一の五千人ぐらいです。

外人登録をした外国人は税金も払って、いろいろな義務も課されているのですが、数で十倍もいる兵隊達の中に埋没してしまつて、もの言わぬ外国人、もの言わぬ羊のような存在なのです。暴れまわっている問題を起こすのは圧倒的に基地の人達なのです。基地内の人達は税金も免除され、高速度道路も無料で通行できる。その上、日本の思いやり予算で学校を建て、クラブを作り、道路を作り、家を作りで非常に恵まれた状況にある兵隊達がいろいろな問題を起こすことは、県民として、納税者として承服し難いことです。

日本復帰をして何が良かったかという点、施政権の返還と同時に裁判権が日本側に移行されたことです。軍法会議にかけられる軍の規律違反以外の麻薬とか殺人、窃盗等の犯罪者は米軍基

日本化政策の売兵となつて沖縄から台湾に行つた教員や警察官などが非常に多く、沖縄はこの戦争で被害者の立場にあります。いろいろな意味で考えると加害者としての立場もあるといえると思います。

沖縄にはフィリピンの領事館があるせいか、フィリピン人の出入りがかなり多く、フィリピンから興行ビザで、エンターテイナーとしてやってくる女性もたくさんいて、アメリカ兵相手の仕事をしています。

昨日、第五分科会を開催しましたが、その中で要保護外国人女性の問題がいろいろ出ていました。沖縄の場合にはいろんなタイプの外国人の問題はなくて、沖縄の女性と結婚したアメリカ人、あるいは東南アジアの人がいわゆるネットワークを求めて相談に来るといふのがほとんどです。

数年前に、外国人のための人権相談というのがありまして、そこで何人かの東南アジアの人達と話したのですが、

地内で起こつた事件でも日本の警察に引き継がれることになってきます。アメリカ側もよく範囲で協力してスムーズに事件の解決が行われるようになっており、日本側の裁判ではアメリカ側は発言権はないのですが、弁護士資格を持った法務官の席がちゃんと法廷内に設けられて、裁判が公平に行われているか立ち会っています。

日本復帰をして良かったのは、このようにいろいろな制度が整つてきたことと同時に、国際結婚をしている夫婦の間では、それ以上に精神的な意味で夫と妻が平等になつたということがいえます。前借金を払つて救われた女性とその夫との関係というのは、決して対等とは言えません。

日本復帰をして、日本の経済力がついてきたということで、夫婦の関係が対等になっていった、そういう意味で非常に良かったと思います。経済力がついてくると、お金のため、IDカードを確保するためだけに酷い仕打ちに

本当に話し相手や相談相手がいなくて困っていることを痛感しましたので、いまその人達のためのグループ作り、ネットワーク作りを小さいながらやっているところです。やはり言語の問題もあつて家族との交流がむづかしく、孤立しやすいことが問題になっていきます。

また、昨日の分科会でも言われましたが、解決方法が違うというのはそれぞれの求めているものと日本が提供できるものがかなり違うということも大きな問題だと思います。

インドネシアの人が公証人役務に行きたいというので何かと思つたら、自分に万一のことがあつたら、自分の預金は夫ではなくて子供に行くように公証人役務で文書を作つておきたいということで、日本人だと普通は考えないようなことですが、その人の求める解決方法は公正証書だったので。

沖縄の男性と結婚している外国人女性のほとんどは夫の家族から受け入れ

られないというのが嫌み、国際結婚をした当の夫が妻に対して日本人になることを求めて、帰化を強制する。帰化は本人が望んでいる場合も多いのですが、その際に元の自分の外国の名前を捨ててなるべく日本人と思われるような名前にして欲しい、そうしないと子供が不幸になるというようなことまで言われるというのです。彼女たちも帰化はいけれども名前までも捨てるとなると自分のアイデンティティはどうなるのか、そういう問題で悩んでいるということがあります。

また、夫が国際結婚したことでよけいに専業主婦になってしまうとか、何でも日本風にすることを外国人妻に強要するということが見られます。例えば、外国人の妻がスーパーでコラケート歯磨きがセールで安かったので買って帰ると夫が非常に怒って、「お前はなんでもアメリカがいいと思っているのか、日本のものが世界で一番いいんだから日本のものを買え！」といいがか

らんだというレベルの国際化と、自分の隣で机を並べて仕事をしている外国人を同僚として受け入れられる国際化が、あるいは嫁として、息子として迎えるだけの準備ができていない国際化かというのは各人によって違うと思います。

他人のお嬢さんが外国人と結婚したと聞くと、「まあ、国際的でよろしいんじゃないですか」と言いながら、自分の嫁はやっぱりそうして欲しくないというのが母親や父親の正直な気持ちでしょう。

外国留学は大いにやっていたけど国際結婚はして欲しくないというようなことは今の時代は通用しません。外国留学をさせるのであれば向こうで結婚することも、就職することもあり得るということを知覚して出されることが必要じゃないかと思います。アメリカに留学させたらアメリカでいろんな外国の学生と知り合って、例えばエジプトの人と結婚したとかいう話は今か

りをつけたり、日本の女は床にはいつくばって掃除をするんだとか、非常に古い日本というものを求めるような横暴な男性が外国人の妻を持った人にも多いのはどういうことなのでしょう。いろいろな成り行きから外国人の妻はもらっただけで、自分は日本男児なんだということを世間や家族に誇示したいという心理が働いているのかと想ったりします。

外国人女性についてはネットワークを作って電話のできるような友達を紹介してあげる。そして必要があれば弁護士を紹介して、もし万一何か起こったら頼めるという安心感を持ってもらうことが必要です。

そういう外国人妻はほとんど正しいインフォメーションを持っていきます。自分は外国籍なので、離婚したら子供は夫にとられるとか、自分は追い出されるとか、自分は日本人じゃないから日本人と同じ権利が無いのではないかなというような、間違っただことを夫に教

らとんとん出てきます。そのように人と人とが交流することによって問題が起こった場合に、自分が持った種だから自分で刈りなさいと言っても、これは自助努力の範囲を越える問題がたくさんあります。

例えば、アメリカで生まれた子供の出生証明書を取り寄せたり、アメリカで離婚したので離婚審判書を取り寄せたいといっても簡単ではないのです。

アメリカの場合、戸籍制度が無くて住民登録制度が無い。ですから、本人が引越したりして音信不通になると、何処にいったか全く分からないわけですから。財産のある人は財産のあるところに法定住所を定めて固定資産税を払っている人もいますけれども、住居を移るのは自由ですので、ほとんどの人は一旦連絡が絶えてしまうと、あとを迎えるのは非常に難しいのです。

また、人を探す場合でも、アメリカにはプライバシー法というのがあります。自分の住所を知らせることを本

えられたりして、そのように考えている女性が多いのです。正しいインフォメーションを把握し、そしてネットワークに参加させて、必要な時にはサポートすることが必要です。そういう意味ではやはり民間団体や民間の力を活用するのが非常に有効だと思います。

国際化社会の内包する問題と対応策

いま、よく国際化ということが言われ、国際化はいいことだとみんな思っています。旅行したり、勉強に行ったり、ホストファミリーに来るのはいい。ところがもっと個人的な本当の交流、結婚とか恋愛とか、子供が生まれるというような自分の家族の一員として外国人を受け入れられるかということについては日本社会、沖縄でもまだまだ抵抗があります。

地域の国際交流のパーティに出席したり、そういう団体に寄付をしたりして、それで自分は国際化を推進してい

人が同意しない限り、例えば本人が養育料の支払いをしないを逃けている場合でも住所を調べることができません。

例えば、カルフォルニアで離婚したといってもカルフォルニアには多数の裁判所がありますし、何処で離婚したか分からない限りその書類を取り寄せるのは非常に困難なわけです。

書類を取り寄せる場合でも、こういう事情でこういう書類を取り寄せたいということを書き添えが書いて申請することはプライバシー法があつてできないので、本人が書いたような手紙を作成して、本人にサインをさせて、それを送る。それには手数料として例えば五ドルのマニオーダーを入ねなければならぬ。そういう手続きをして問い合わせても、記録に無いとなれば次はその隣の裁判所、という具合に、裁判所の住所録を持ってきて次々に調べるしかないわけです。ですから、どこで離婚したか分からなかったり、夫が協力してそういう書類を送つ

てくれない場合には、児童養育手当て等を受けるための離婚裁判書がなかなか取れないという状況があるわけです。行方不明者探しとか、書類の取り寄せなどは、国と国の外交ルートを通してやるべきものと思います。

今の日本の縦割り行政の中では外国人に対する対応はとてできませんので総合的な相談センターというものをつくって、そこに行ったらとりあえず受けとめて貰えるような受皿作りというのが真に是非必要だと思います。

茨城県で外国人のための生活相談をやつていらつしやるといふことですが、非常に素晴らしいことだと思います。それをさらに広げていって、きちんとしたインテイクと、リファアラル、これはあそこにお願ひしましょうと引き継いでいこうな体制が必要です。クワイエットを見ていますと、あつちへ行きなさいというだけではだいたいは行かないですね。是非行くように勧めて行つたかどうか確認するとか、そこま

こういうことを意識して欲しいというふうなトレーニングがどうしても必要になってくると思います。

今、日本国政府として必要なのは、外国人の問題に何まよとどう対応するかという基本的ポリシーを作り上げるということです。いまは移民政策だというふうな緊急事への対応と同時に、長期的な対応をどうやるべきなのか、基本はどうかということになります。

日本は国際化に対してまだ意識が浅く、非常に無難で純粋な部分があると思います。ですから、外国人とあつても同じよかと助けあふたいというその気持ちや真心は非常に多いのですが、日本は閉鎖社会ですの、前脚がありませんといふことで断れるところですから、一旦前例がでたら、「一つ突破口ができればとどろ入ってきます。いわゆる水が高い所から低い所へ流れるように、経済の豊かな日本は、国に何とかして入つてきたら、日本の恩恵にあずかりたいと思つて入る運

でサポートしながらやっていくことが必要で、このインテイクとリファアラルを合わせてアメリカではリファアラルスペシャリストという職種があります。相談業務においてはそういうものが必要だと思います。また、そういう相談センターに外国語ができる人を常勤で置くことは非常に難しいことですので、専門職のパートタイム化というのが必要になってきます。月、水、金の午前中は英語のできる人が来ますというふうな形でできると思います。

ボランティアを使うという考えがすぐ出てくると思いますが、ボランティアにはボランティアの限界がありますし、守秘義務も責任を負わせられぬ範囲もあるので勧められません。ケースワーカーやカウンセリングというのは、有償と無償とあるが、選別が通しては本当はできないと思います。

アメリカのカウンセラーと日本のカウンセラーとを言ひ違い、アメリカ人の夫と日本人の妻がいての共同カウンセ

はたくさんいます。それは当然のことなんです。ですから、今日本が対応をみると、日本人は幾ら税金を払つても足りないくらいにいろいろな国のいろいろな問題を引き受けてしまうことになりま。ドイツやフランスでも移民を受け入れていろいろな問題が起こり、今また対応を厳しくしたりしています。そういう外国の例も見ながら、人権の問題、人権の問題と国の政策というものを上手く噛み合わせる必要で、そういう基本的なものをもつてはじめて皆さんの外国人に対する緊急な対応ができるのだと思います。

米軍人と結婚をした沖縄の女性が自分達はアメリカに転動して行くけれども、子供は身体障害者なので、この子は日本の方がいろいろな手厚い保護が受けられるので日本に置いて行きたい」と言つてきたケースがありました。それを聞いた関係者は「日本人のお母さんの子だから預かつてもいいんじゃないか」と非常に善意に受け取つて、そ

リングという形だと非常に効果的です。カウンセラーの一人が選別を兼ねるという条件ですが、縦、横、斜めのものとか全部選別していき、これは非常に効果的です。専門性のある選別を嘱託をお願いするのがよいと思います。

今、安全にボランティアに頼る傾向がありますが、ボランティアだと来てくれるだけで有り難いということでも人の能力について、いろいろいうことはできないわけです。でも考えてみますと、我々がちよつと英語ができるからといって、外国に行つてそこで何か深刻な問題について選別を頼まれて果たしてできるでしょうか。その国の文化や国民性というものがあつて分かんないければ同じ言葉を使つていてもそれが何のために、どういう意味で言われているのか分かんない。言葉の後ろにあるものが読めないわけです。ですから、是非通訳を嘱託してアールとして登録しておいて、その人達の登録の際にはオリエンテーションをして、

の方向で話がある程度進んでしまつてもそれはおかしいです。基本的に親が責任を持つて、できないところを行政が補つていかなければならないのです。外国人の問題というのは日本が非常に注意をしながら、日本人の優しさや親切さを示し、人権を守りながら、日本の国としてできることとできないことをハッキリと見定めてやつていく必要があるように思います。

本当は外国人に対する二十四時間体制の相談業務が必要で、沖縄の婦人相談所が二十四時間体制であるということも聞いて非常に誇らしく思つています。二十四時間、人を配置するのではなくても婦人センターのような総合相談センターが県にできた場合には、そこに英語やスペイン語などいろいろな国の言葉で書かれた相談用紙を備え付けておいて相談者が来たら夜中でも守衛がそれを渡して連絡先などを記入してもらい、翌朝は担当者がそれを見て連絡を取るか、あるいは留守番電話

で相談が録音できるように設備が各県何処にでも必要ではないでしょうか。国際福祉相談所では年間約四百五十件のインテイクがあります。相談だけとか、インフォメーションを与えただけで終わるようなケースもたくさん

ありますし、夫婦間調整のように長期に渡つてケースワークをしたり、周囲との調整をしたりするものもあります。法的身分関係の調整も多く、戸籍の整備、翻訳、戸籍謄本の取り寄せ、アメリカからの出生証明書や離婚裁判

書の取り寄せなどがあります。そろそろ時間になりましたけどもつた話もできませんでしたが、沖縄の職後五十年の一面をお伝えしたということでお話し頂きたいと思つています。有り難うございました。

